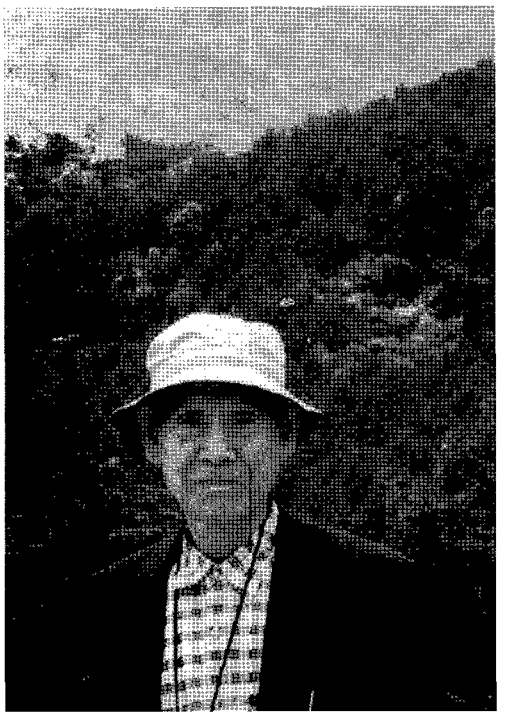
李燦先生を偲んで

本会会員で，韓国地理学界に大きな足跡をしるされたソウル大学名誉教授，李燦（イ・チャン）先生は，2003年1月11日，惜しまれつつ世を去られました。先生の訃報に接した時の衝撃と悲嘆の思いは，一周忌をすぎた今日でもそのまま残っているような気がいたします。先生は韓国の後進はもとより，韓国研究を志す日本人研究者にたいしても，無限といっていいほどのご支援を注いでこられましたので，こうした思いは先生のお人柄を知る多くの人々に共通した感慨にちがいありません。

李燦先生は1923年1月23日，当時の黄海道延白郡温井面でお生まれになりました。この地は朝鮮戦争（1950～53）のあとで南北の軍事境界線の北側に入ってしまいましたが，1945年に米ソ両軍が朝鮮半島に分割進駐する際の境界となった北緯38度線からは南に位置するため，南北分断の当初は南側に属していました。このことは先生のご経歴にとって，たいへん重要な分かれ目だったといえます。

先生は日本の植民地統治下の1942年に平壌師範学校を卒業されました。当時同校の地理担当教官は，のちに『地理名称の表現序説』などの著作を残された椙村大彬先生だったそうです。李燦先生は椙村先生が顧問を務めるバスケットボール部におられたこともあって，長く師弟の縁を大切にされ，椙村先生の没後も，機会あるごとにご遺族のことを気にかけておられました。

平壌師範をご卒業後，しばらく延白郡の国民学校で教壇に立たれた先生は，1946年9月にいったんソウルの成均館大学史学科に進まれましたが，大韓民国発足直後の1948年9月にソウル大学校師範大学地理学科（韓国でいう大学校・大学は日本の大学・学部にほぼ相当）に転じられました。しかし在学中に不幸にも朝鮮戦争が勃発し，北朝鮮軍の占領下からの脱出行などで非常なご苦労を重ねられたそうです。1951年9月，苦難を乗り越えて同大を卒業されたあと，ソウル大学校師範大学附属高校などでの教員生活をへて，1955年2月に渡米され，ルイジアナ州立大学で地理学を修められました。アメリカでのご研究の成果は，“A Culture History of Rice with Special Reference to Louisiana”としてまとめられ，1960年にPh.D.の学位を取得されました。韓国の地理学者として博士号を取得されたのは李燦先生が最初とうかがっております。



（2000年5月29日　佐々木史郎 撮影
歴史地理学会巡検，雲仙にて）

同年に帰国された先生はただちに母校であるソウル大学校師範大学に奉職され，1988年2月に停年退官されるまで，一貫して母校で

教育研究に邁進されました。1975年には師範大学地理教育科から新設の社会科学大学地理学科に移られましたが，ソウル大の地理学の大きな柱として，双方の地理学教室の発展に尽くされました。

先生は英語圏の地理学の動向を韓国に伝えることに大いに寄与されましたが，ご自身の研究ではとくに文化・歴史地理学，社会科・地理教育，韓国地図学史の分野に重点をおいてこられました。中でも韓国古地図の研究は先生のご業績の中核をなすもので，重要な著作を数多く残しておられます。とくに大著『韓国の古地図』（ソウル・汎友社，1991年）は，学術図書の顕彰で権威と歴史を誇る韓国百想出版文化賞の著作賞に選ばれており，近々日本語訳の刊行も予定されています。

学会活動としては大韓地理学会会長，韓国社会科教育会会長，韓国測地学会会長などの要職を歴任されたほか，国際地理学連合の副会長として，2000年のＩGCソウル大会の成功に貢献されました。また，1988年には韓国文化歴史地理研究会を設立され，その運営を主導されました。同研究会は1990年に韓国文化歴史地理学会と改称され，今日にいたっておりますが，この学会こそは晩年の先生が後進のために心血を注がれた最大の遺産の一つです。

節制と健康管理には人一倍留意された先生は，古稀をすぎても健脚を誇られ，学会の巡検をたいへん楽しみにしておられました。2000年５月には本会の雲仙巡検にも同行されましたので，そのご壮健ぶりに驚かれた方も多いことと思います。

韓国文化歴史地理学会の巡検には欠かさず参加され，すべての行程をともにされました。夕食後に宿舎で開かれるセミナーでも，お疲れのそぶりも見せられず，最後まで議論の輪に加わられるのが常でした。先生は権威を誇示して他を威圧するような態度とはまったく無縁の方でしたので，セミナーの雰囲気は真摯なやりとりの中に自然な敬愛が通い合うたいへん好ましいものでした。しかし，同学会の定例巡検へのご参加は，2001年に行われた長崎県対馬めぐりが最後となってしまいました。同年，長らく収集してこられた韓国の古地図160点あまりをソウル市立博物館に寄贈されて話題になりましたが，今にして思えば，この時すでにご研究の区切りを考えておられたのかもしれません。

翌2002年６月，楽しみにしておられた中国東北部の巡検は喉頭癌でご入院のため不参加となり，その後，退院されていったん持ち直されたかにみえたものの，結局病の進行をくい止めることはできませんでした。ご入院中に一度病室をお訪ねできたのが，私にとってせめてものなぐさめとなりました。亡くなる数カ月前，富山大の鈴木信昭教授（朝鮮史）がご自宅で療養中の先生に古地図研究のことでご教示を請われたところ，会って話そうということになり，点滴をされたまま起きてこられて，しばらくお話を交わされたということです。先生のお人柄をしのばせるエピソードとしてご紹介させていただきます。

先生の墓所は京畿道坡州市炭県面法興里にある公園墓地に定められました。北朝鮮との境を流れる臨津江（イムジン川）にほど近いこの墓地は，北に故郷をもちながら南北分断で帰郷を果たせずに世を去った人々のために造営されたものです。先生の霊魂は朝鮮戦争後50年をへて，今ようやく故郷の地を訪ねておられるのかもしれません。

ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げるとともに，長年支え合って同じ地理学者の道を歩んでこられた奥様の金蓮玉先生（気候学）には，ぜひとも李燦先生の分までご長寿を続けられることをお祈りして，追悼の辞とさせていただきます。

（2004年１月15日・佐々木史郎）